

# 歴史と神話への視座

——疑古派禹天神論の検証からの再出発——（下の三） 中島敏夫

●●●●●

## 十二

本論も核心に入る。『尚書』中の禹の伝承が如何なるものか。この章ではこの問題について述べる。

『尚書』中の禹伝承の主軸は「頭三篇」（『今文尚書』による。晩書「古文尚書」では5篇、プラス晩篇「大禹謨」）にある。『尚書』の文は古くかつ難しく、理解困難なところが多い。解釈も多様であり、それらをすべて記すことはできない。適宜、適当な解を選んで、訳出した。他にも多解あるところである。例えば、「堯典」冒頭の「帝堯曰放勳」の部分については、「放勳」は、「勳」を「いさお」Ⅱ功績とし、「放」を「模倣」の「倣」とする。つまり「堯は（上世

の）功績に倣って云々」と解する。「曰」は、帝堯について「述べれば」の意である。もう一つの解は「放勳」を堯の名とする。名を「曰く」放勳とする。舜についても、名を「重華」とする解と「華を重ね」（文化を積み）とする解がある。また、禹についても、名が「文命」であるとする解と「文化あふれる命を発し」とする解がある等である。

まず、この問題の文献的な面について述べる。

『今文尚書』では『尚書』冒頭の3篇「頭三篇」は、「堯典」「皋陶謨」「禹貢」の3篇である。しかし『古文尚書』では、『今文尚書』の「堯典」が分割され、後半が「舜典」となっている。「皋陶謨」も『今文尚書』では1篇だが、『古文尚書』と晩書『古文尚書』では篇が分割され、後半は「益

「稷」となっている。この「堯典」と「舜典」両者は内容を見ると連続しており、また「皋陶謨」と「益稷」も両者は連続していて、もともと両篇は一篇であつたとする見解はもつともである。さらに晩書『古文尚書』では、「舜典」と「皋陶謨」の間に「大禹謨」篇が挿入されている。従来、「偽」とされてきた篇である。私がこの見解に必ずしも賛成できないことは、前にすでに述べた（本論中篇参照）。この問題については、後の章でさらに検討を加える。これに「禹貢」を加えると、計6篇＝「頭6篇」となる。『古文尚書』では本来は「舜典」が現「舜典」とは別にあつたが、亡佚したともされている。また現「古文尚書」（＝晩書『古文尚書』）では「舜典」の冒頭には「曰若稽古帝舜、曰重華、協于帝。濬哲文明、溫恭允塞。玄德升聞、乃命以位。」の28字（訳：「記録に次のようにある。古えを考えてみるに、帝舜、名は重華。帝堯に協力し、英哲で教養に富み、性格は溫恭で誠実。高い人徳は上に聞こえ、帝位に即くよう命じられた」）があるが、『尚書正義』によると、この部分は、六朝南齊、明帝（蕭鸞）の建武四年（四九七）に呉興の姚方興が大航頭（地名、不詳）で孔安國の伝える古文「舜典」を入手した。これを朝廷に献上。その中にあつたもので、以後「舜典」冒頭に置かれてきたものであると述べている。この部分についても、従来、『偽古文尚書』同様に偽であるとされてきている。

これら篇の、『尚書』中の篇分類がどうなっているか。『今文尚書』では「堯典」「皋陶謨」「禹貢」の「頭三篇」は〈虞夏書〉に分類される。『古文尚書』では「堯典」以下「益稷」までが〈虞書〉であり、「禹貢」以下が〈夏書〉とされる。他に「堯典」のみを〈唐書〉とする考えもある（清皮錫瑞『今文尚書考異』）。「唐」は唐陶氏の堯を指し、「虞」は有虞氏の舜を指す。一般には、「堯典」「舜典」及び以下「益稷」までの篇は、有虞氏舜の時の記録と考えられて〈虞書〉とされてきたものである。「禹貢」以下が〈夏書〉となる（唐、孔穎達『尚書正義』による）。

『尚書正義』では「舜典」の後ろに小序が付いていて、「汨作、九共」9篇、「堯飫」があつたが、「亡佚す」とある。「汨作」は「汨」（＝洪水治水の政治）興る」の意。「九共」については「共」字は「貢」字と同じで、これが9篇あるということは「禹貢」の九州の「貢」を言うのではないかの説がある。「堯飫」は「勞い（＝堯、賜る）の意。内容は「帝、下土を釐め、方（四方）にその官を設けてその方に居らしめ、生（＝姓）を別けて類を分ける（人々に姓を与えて分類した）」と言う。舜・禹とに關係を持つ篇ではあろうが、具体的には不明である。

尚書中に出る他の禹に関わる資料は、すべて禹についての後世の伝聞を伝えるもので、副次的な資料である。顧頡剛の論は、「頭三篇」のうちでは「禹貢」のみを取り上げ

る。しかし、彼が取り上げた「立政」「洪範」<sup>こうはん</sup>「呂刑」<sup>りよけい</sup>はこうした後世の伝聞を伝える副次的な資料に過ぎない。

「堯典」(便宜上ここでは『古文尚書』の編次によって「舜典」部分は後で述べる) 442字。小序を除外すると419字。

冒頭、堯の高い人徳が述べられる。ついで、堯は羲和氏<sup>ぎわ</sup>に対して、天文を観察し曆を作るように命じる。さらに、誰を登用すればよいかを側近に諮問<sup>しもん</sup>する。最初、朱(堯の息子)と共工が推薦されるが、堯はふさわしくないと拒む。堯は、今、洪水がたいへんな有様だが、これを治めるのは誰か、と尋ねる。皆が鯀<sup>こん</sup>を推挙する。堯はだめだと拒むが、皆は試しにやらせてみるでもないかと言い、その言に従って、鯀に治水させてみる。だが、九年、経っても成果は上がらない。堯は四岳に言う。私は七十年、帝位にあつた。誰か、後を継ぐ者はいないか、と。そこで皆から舜が推される。「彼の父母弟はろくでもない人間だが、彼は皆をもち立て一家をおさめた立派な人だ」と推挙されるのである。堯は、舜に自分の娘二人を嫁がせ、彼の手柄を試してみることになる。

以上が「堯典」の内容である。禹に關しては、ここに出る鯀が一般に禹の父とされる人物である点が挙げられる。

「舜典」793字。小序を除いて718字。

舜についても、最初、その高い人徳が述べられる。さらに、堯による天子に登用しようとする試験の結果も上々と出る。堯は言う。「来たれ、舜よ。三年間試したが、お前の成績はきわめて良い。帝位に上れ」と。舜は、徳がないからと辞退するが、結局、正月一日、祖廟にてその継承を受ける。その後で、上帝、山川の神等々、諸神を祭り、群侯・群侯を集める。ついで、全国の巡狩に出る。東の岱宗(泰山)から始め、南、西、北と順次巡って、祭祀をとり行い、地の諸侯と朝見する。以後、五年に一回の巡狩を行うこととする。十二州・十二山を定め、川を浚渫<sup>しゅんせつ</sup>する。また刑罰を定める。共工、驩兜<sup>かんとう</sup>、三苗、鯀の四悪人をそれぞれ四方の果てに追放する。二十八年で堯は卒す。三年間、全国は喪に服する。正月、舜は帝位に即く。十二牧(各地の長官)に「食が一番大事だ。佞人(おもねる悪質な取り巻き)を使わなければ、蛮夷は帰順するだろう」と指示する。

次いで、四岳と相談して、次々と賢人を登用する。まず、禹(伯禹)Ⅱ地方の諸侯「伯」位にある禹に洪水の治水を命じ、司空の職に任命する。禹は后稷・契・皋陶に譲るが、認められず、その職を務めることになる。その後で棄・契・皋陶・垂、さらに益、伯夷、夔、龍、等々が任命される。夔に対しては音楽の官を命じ、音楽を奏で、百獸が随い舞う。こうして「二十二」に職務が与えられる。(この

「三十二人」が誰々を指すか、計算が合わない。そのため諸説ある。

「大禹謨」(晩篇、所謂「偽古文」篇) 846字。小序を除いて825字。「大禹謨」以下の3篇「皋陶謨」「益稷」は、主として帝舜の前で交わされる禹・皋陶・益との対話である。禹が帝位に即く前のことである。「大禹謨」篇は従来、偽とされる篇であるが、内容的には他篇に出ない重要なことが述べられている。

篇は三つの内容からなる。一、帝と益・禹との対話。二、舜の禹への讓位。三、有苗征伐。この三つである。

第一の対話は、帝舜と益・禹、さらに皋陶が加わり展開し、政治の要諦が語られる。禹は六府・三事を述べる。六府は、水・火・金・木・土・穀。この六者を大事にして生活に役立たせるといふ。三事は、正徳(徳を正しくすること)・利用(生活を便利にすること)・厚生(生活を豊かにすること)の三つである。この六府と三事が「九功」(九つの功績)に数えられる。さらに舜は言う。「格れ、禹よ。朕(私)の帝位に宅ること三十三載(歳)。耄期し(耄碌し)勤むるに倦く。汝、惟れ怠たらず、朕が師(大衆)を総じよ」と。第二は、洪水が私に警告を与えた。しかしお前が励んでくれたので、治水に成功した。「地平にして天成る」と(現在の日本の年号「平成」はこれにもとづく)。「汝、終わり

に(最終的に)元后(帝位)に陟れ」と。禹は辞退するが、正月の一日、祖先の廟で受命する。

第三は、舜は帝位を禹に讓るが、これは禹が摂政となることで、讓位した舜が帝位にあることにはかわりはない。舜は、禹に對して、服従しない有苗征伐を命じる。禹は群后(諸侯たち)を集めて有苗征伐にかかる。三旬(三十日)、苗民は抵抗して服従しない。益が禹に助言する。決して力でねじふせることはできない。人徳でこそ彼らの心をつかめるのだ、と。禹は撤兵する。七旬(七十日)後、有苗は帰順してくる。

「皋陶謨」352字。次の「益稷」と一体である。皋陶は舜を輔佐した人物で、刑獄を担当。禹が禪讓を受けた後も引き続いて禹の補佐を務めるが、これは舜帝の前での禹との会話で、皋陶の政治的な理念が語られる。内容的には、政治の要諦は、人を知ること、民を安んじることである。人は九の徳を行わねばならない。九の徳とは「寛にして栗、柔にして立……」(心広く寛容であつて慄然とした引き締まった心。柔和でいて事を立てやりとげること……)等々の九項である。

「益稷」622字。「益稷」の篇名は篇中に出る益と稷の二人から取られたものであるが、二人の人名は篇中で大き

な意味を持たず、篇名の命名は不適切の評がある。この篇では、前篇に引き続き、帝舜の前での会話が続く。舜と禹の会話が主をなす。その禹の話の中に、禹の行った洪水の治水が語られる。禹が言う。「洪水、天に滔り、浩浩として山を懷き、陵に襄る。下民、昏墊す（困窮し溺れる）。予（私）、四載（四種の乗り物）に乗り、山に随い（山から山へと回って）木を刊る。益とともに庶（庶民）に鮮食（新鮮な食）を奏す（提供した）。予、九川を決し（通し）、四海に距き、畎澮（田畑の大小の用水路）を濬り（浚渫し）川に距く」。また稷と共に食物を植え、食料を調達する。さらに続く禹の話中に、治水時の彼の苦勞が述べられる。

「私は塗山に（妻を）娶り、娶った四日の後、早くも工事に出かけた。生まれた子の啓が呱呱（ワーワー）と泣いたが、私は子の面倒を見もせず、ただ土木工事のことだけを計った。天下の五服（諸侯の制度）を制定する助けをなし、万里四方の天下が仕上がった。一州には十二の師（一師は二千五百人。合計三万人の群衆）が工事に加わり、外は四海に迫り、各国には全部で五人の長を立て治めて、それぞれ功績を上げた。しかし苗民のみは頑固で官に従わない。舜帝よ、それを忘れぬよう」。

この後は、夔が音楽を演奏し、百獸が舞いおどる。夔は

帝と共に太平をことほぐ歌を歌う。その歌詞が引用される。

「禹貢」1196字。小序を除き1184字。「盤庚」篇1285字に次ぐ大篇である。

前篇同様に、舜の治世下での禹の治水と全国統合の業績が語られる。舜帝治下であることに注意が必要である。全国が九州に分割され、それぞれの州の山川の地理、土地のランク、産物・貢賦が述べられる。中国最古の地理書だとされている。この章の終わりの部分で、全国の体制がどのように策定されたかが述べられる。全国九州の土地の貢ぎ物が記されているので「禹貢」の名がある。九州は冀州・兗州・青州・徐州・揚州・荊州・豫州・梁州・雍州の九つ（二四七頁図表30参照）。

篇の冒頭では「禹、土を敷く。山に随い、木を刊り、高山大川を奠す（定める）」とあるが、この文は、前篇の「益稷」篇の文「随山刊木」等と共通し、ことと内容的に同一事を言っているのが認められる。最近発見された西周青銅器銘文「夔侯盥」（保利芸術博物館所蔵）にこの文章がそのまま出るのが注目される。「土を敷く」とはどういうことか。このことは、最初に述べた顧頡剛の論（中篇四章）と直接密接に関係してくることもある。「孔傳」（漢、孔安國の傳。偽の説もある）は「洪水、汜濫し（汜濫し）、禹、九州の土を布き治む」と説明している。「敷」は文字として

は「敷き広げる」、布のような物を延ばし広げることである。その時の「土を敷く」とは具体的に何を指すか。結構、難問である。治水の際に土を入れて広げることか。あるいは、抽象的に、治水したその土地を全国的に展開させることを言うか。宋の朱熹の弟子、蔡沈の『書集傳』では、「敷、分なり。土地を分別し、以て九州を爲すなり」と説明する。

土地を九州に区分けすることと取る。これは前にも見たように『詩經』（魯頌・長發）の「洪水茫茫たり、禹、下土の方を敷く」（本論中篇引用）の「敷く」と同じである。そこでは「洪水は茫茫と果てなく広がり、禹は下に土地の「方」を敷き広げた」。「方」は「一定の四方形をなす土地」と説明しておいた。「高山大川を奠す」とは、「孔傳」は「奠は定なり。高山は五岳（東西南北中の名ある五つの名山。泰山・華山・衡山・恆山・嵩山）。大川は四瀆（全国の四つの名川。長江・黄河・淮河・濟水）。その差秩（ランク）を定め、祭祀の禮の際にそれに依拠する」と説明している。

以下では、「頭三篇」以外の他の資料について、禹に関する記述がどのようなものであるかを述べる。この禹の資料は次の5篇である。

「五子之歌」（夏書）

「仲虺之誥」（商書）

「洪範」「立政」「呂刑」（3篇共に周書）

うち、「五子之歌」「仲虺之誥」は従来偽書とされてきた篇、即ち晚書晚篇。「洪範」「立政」「呂刑」は真とされてきた篇で今文・古文（真・晩）全てにある。

「五子之歌」（261字）：晚書晚篇。五子は夏王朝二代目の啓（禹の息子）の子供達五人を指す（つまり禹の孫）。同じく啓の息子である兄の帝太康が王位を空けて、享楽に耽り、狩りにうつつをぬかして帰ってこない時、洛水のほとり、兄太康の帰るを待ち望み作った歌。全五首。冒頭に「大禹之戒を述べて以て歌を作る」とあり、五首の歌全部の歌詞が記されている。歌中で禹の偉大な業績が称えられる。

「仲虺之誥」（334字）：晚書晚篇。仲虺は殷商の湯王の左相をつとめた人物。「誥」は「告」と同義。仲虺が湯王に告げたことば。殷の湯王（湯王は夏王朝を滅ぼした殷の帝）が夏の桀を討伐し、南巢（安徽省巢湖の辺り）から帰る途中、夏王朝を滅ぼしたことを後世に咎められるだろうと恐懼する。その時、仲虺が王に説き聞かせた内容を述べた篇。「有夏（氏族名・王朝名には「有」字を冠する）は昏徳（暗愚）にして、民は塗炭（の苦しき）に墜つ。天乃ち王に勇智を錫い（賜い）、萬邦に表正（正しき模範）たらし

む。禹の舊服を續ぎ（禹の創設した事業を繼承し）、茲（ここに）に厥（その）の典（典法）に率（したが）い、天命を奉じ若（したが）う。夏王、罪有り、上天を矯げ誣り、以て命を下に布く」と説き、恥じることなきを説得した。夏を倒した殷であるが、夏の始祖禹の真の後継者であると自負するのである。

「洪範」（1044字）：周武王の滅商の翌年（前一〇四五）の作。武王が商を滅ぼし紂を殺した後、周は、紂の子である武庚を商の跡継ぎに立てた。武王は、紂の叔父である箕子に、「天が与えた国を治める原理は何か」を尋ねた。箕子が答えた内容の記録がこの篇である。

箕子が言う。「私が聞くとところによると、鯀は洪水を埋め治水を行った時、天の理である五行を乱した。帝（上帝）は怒り、「洪範九疇」（大いなる規範である九つの範疇＝分類概念）を鯀には与えなかった。そのため、天の大いなる常理は敗れた。鯀が刑死し、禹が後を継ぐと、天は禹にこの「洪範九疇」を賜った。そのため、天の大いなる常理はここに展開することになったのである。天が禹に与えたこの「彝倫」（おおいなる人倫の原理）がこの「洪範」である。内容は五行、五事、八政、五紀、皇極、三德、稽疑、庶徵、五福・六極であり、それぞれについて詳細に述べられている。その思想的な意味は大きい。「洪範」全1044

字の大半がこの「洪範九疇」の説明で占められているが、ここでは詳述しない。項目のみを上挙げた。

「立政」（671字）：周公旦（文王の子、武王の弟）は成王（武王の嫡子）がまだ若年だったので、自分が代わりに摂政となった。成王が成年の後、政事を成王に返す。その時に周公が成王及び百官を戒めた言葉である。

周公は夏王朝から説き起こし、商、更に文王・武王の時を語り、政事で人を登用する際、如何にあるべきかを述べる。その中で、「今、文王の子孫たる孺子（幼な子）の王よ。其れ庶獄（刑獄）において誤まる勿かれ。惟だ有司（官府）の牧（牧人）なるかな。其れ克く爾が戎兵（軍隊）を詰め（治め）、以て禹之迹に陟れ」という。

「呂刑」（954字）：西周の穆王の時の作である。篇中に「享國百年」とある。武王が伐紂（前一〇四六）した後の百年は穆王時（前九七六～前九二二）に当たる。呂侯は穆王時の司寇を務めた人。後に「甫」の地に封じられ「甫侯」とも称する。この篇は、呂侯によって、四方の政事を司る典獄（司法官）及び諸侯たちに訓じられた話。刑法に関する話なので「呂刑」という。篇全体が夏王朝以来の刑罰について述べられており、その中で、三后（后は諸侯をいう）即ち伯夷、禹、稷の三人のことが語られる。本論中篇四章

図表29 『尚書』に於ける禹伝承一覧)

『古文尚書』による分類	篇 名	a 舜から禹への禪讓	b 禹の洪水治水	c 「九州」	d 三苗討伐	e 諸侯統治	f 舜朝での同僚	g 禹の偉大な業績	h 禹の人徳	i 禹の政治理念	j 鯀	k 禹の結婚	l 禹の子啓
虞書	「堯典」										●		
	「舜典」	●	●		●		●				●		
	「大禹謨」	●	●		●		●		●	●	●		
	「皋陶謨」				●		●						
	「益稷」		●		●	●	●						●
夏書	「禹貢」		●	●		●		●				●	●
	「五子之歌」							●	●				
商書	「仲虺之誥」							●					
周書	「洪範」							●		●			
	「立政」							●					

ですでに掲げた。参照していただきたい。

以上が『尚書』に見る禹の伝承である。

全体としては、禹の生存中の直接の言及と、後世の禹についての間接的な言及、この二類に分かれる。前者は「堯典」「舜典」「大禹謨」「皋陶謨」「益稷」「禹貢」の諸篇である(便宜上、『古文尚書』篇名によった)。後者は『尚書』中では「五子之歌」「仲虺之誥」「洪範」「立政」「呂刑」の5篇である。

ここに見た禹に関わる伝承をその話の内容によって整理・分類してみると、以下である。

a 舜から禹への禪讓    b 禹の洪水治水    c 「九州」  
 d 三苗討伐    e 諸侯統治    f 舜朝での同僚  
 g 禹の偉大な業績    h 禹の人徳    i 禹の政治理念  
 j 鯀    k 禹の結婚    l 禹の子啓

以上の分類項目は、要素的に相互に重なり合うものもある。この分類に従って『尚書』各篇の内容を一覧にした。図表29を参照されたい。

ここで特徴的なことの一つとして、禹の偉大な業績については、治水と九州の設定が挙げられるが、実はこれらは



文中からも分かるように舜の治下での業績で、舜の命を受けて実施したものである。禹は舜に禪讓され帝位に即く。だが、禹の即位後の業績については、現『尚書』では若干の記述がある以外にはほとんど触れられていない。「禹貢」は舜治世下の業績であるが、「禹貢」の次の篇は「甘誓」（禹の子啓が有扈氏と戦った時の誓い）となっている。

## 十三

前章で挙げた『尚書』頭三篇について、これをどう受け止め評価するか。これが我々に課せられた当面の課題である。この章ではこの課題を扱う。ここでは、この課題に関する見方を、徐旭生の論文「堯、舜、禹」でもって考察したい。徐旭生は『中國古史的傳說時代』の著書で知られ（本論上篇で紹介）、夏王朝遺跡と目される二里头遺址の発見（一九五五年）を主導した人物である。二里头遺址の発見は偶然になされたのではない。ヨーロッパで、シュリーマンが神話伝説からトロイ遺跡の存在を信じ、それが遺跡発掘につながった、その業績にも並び比せられる快挙であった。論文は次である。

徐旭生著「堯、舜、禹」上篇：

『文史』39輯（中華書局、一九九四年）。

同

下篇：

『文史』40輯（中華書局、一九九四年）。

徐旭生の論文「堯、舜、禹」は、彼の遺著で、篇後の黄石林の付記（一九九一年一月）によれば、徐旭生が生前「この論は考古材料を補う必要がある」と言っており、その委嘱に遵じて黄氏が近年出土の考古材料を補ったものだである。論文中で、原文と補記とは区別されておらず、どこまでが原文でどの部分が補記かは判別できない。

斯論（以下「徐論」とする）は、文献資料を考古発掘材料で検証するという方法を取る。その方法は王国維が提唱した所謂「二重検証法」に当る。最近の考古学の成果には著しいものがあり、まさしく日進月歩のおもむきがある。今は黄氏による補足がなされたとはいえその後もさらに一段と大きく進んでいて、この論はそれ以前の段階のものであることに留意しておく必要がある。ここでは、徐氏の論を私の理解に従って整理した形で紹介する。一つ一つ事細かく紹介するのではなく、全体としての傾向・特徴・問題点について述べることにしたい。

一、徐論は、全体として頭三篇の内容を信頼できると認める。内容は、大きく言って文明の発展段階と登用人物について、信頼できるかどうかを判断する。文明の発展段階では、国家成立、暦法、地方制度（巡狩・十二州・九州）、産物、度量衡について検討がなされる。登用人物について

は、人名なるものの意味、義和、任官された二十二人（禹・稷・契・皋陶・垂……等々）について述べる。

二、方法論的に二つの基準を述べる。一つは、史料の文献としての処理の基準についてであり、二つは、文明の発達段階を基準にして見て、内容が可能かどうかを判断する。

第一の基準は次である。過去には、史料処理の判断は「正經」と「正史」が基準であった。「正經」とは『尚書』頭三篇と『易』繫辭傳。「正史」とは『史記』五帝本紀・夏本紀・殷本紀・周本紀である。その他に『春秋』三傳と『國語』がある。しかし、今の新史学では、基準はこれら整理・系統化された文献（中島付記『正統』系統化資料とここでは呼ぶ）を基準として考えるのではなく、系統化されない、即ち、整理が施されていない、手の加えられていない文献資料（中島付記『傍系』非整理資料と呼ぶ）の方を基準にして処理をする。先秦古籍中の零細な資料でもって、正經・正史の系統化を経た資料を校正するのである。それは逆ではない。過去の歴史学者の態度とは違う。こうした系統化されていない文献に合っているか、いないか。これを基準にして判断するのだとする。この点については、私（中島）には異論がある。

徐論のこうした基準は確かに一理ある。（『正統』系統化資料か、それともあまり手が加わっていない『傍系』非整理

資料か。これは判断に際しての一つの基準となり得る。しかし今ここで検討しようとする対象が『尚書』頭三篇自体なのである。「基準にならない」と言われるその篇自体を対象として検討するのである。従って、基準そのものの意味が問われることになるが、それは、基準の最初の提起以上には立ち入っては検討はなされない。そこで、第二の基準が提起される。だが、ここでは、頭三篇は、第一の基準とはむしろ逆に、考古学的成果に照らし合わせ信頼できるとの結論が出されている。第一の基準の持つ意味は逆に否認される結果となっているのである。つまり、一般的な文献資料の基準として挙げられる基準、（傍系）非整理資料を第一の基準にするという原則はここでは意味を持っていない。かつ、系統化されたものは信頼性に乏しいと言いつつ、本論中では、これまた逆に、「他に見られないから信頼できない」あるいは「他の多数の資料に見られるので信頼できる」といった論が展開されている。例えば、『舜典』中で、放齊は堯の子丹朱を推薦する。堯はこれを拒否する。徐論は、これについて、放齊の名は他書に見えないからという理由で、この内容は条理に遠いと結論づける。こういった論証のしかたが他にも幾つか見られること。これは第一の基準と矛盾しており、第一の基準そのものが妥当ではない結果だと言わねばならない。この問題はさらに一歩立ち入って検討を加える必要があり、この章の後半で改めて論じよう。

三、基準の第二は、考古学の成果を基準にして文献の内容を検証するという方法である。文献の内容が考古学上の成果に照らし合わせて、あり得るか、信じられるか。考古学にこうした基準を求めることは必要であり、かつ基準として成り立つ。徐論は、その基準によって、a信じられるもの、b可能性のあるもの、c可能性のないもの、この三者に分類する。これもなるほどもっともなことである。だが厳密に検討してみるとこの点にも問題が生じる。即ち、論文中では実際にはこの基準は厳密には適用されていない。a類とb類とは厳密には区別されていない。あいまいに「あり得ること」「信じられる」という判断が下されており、a類か、b類かは、読者には判断し難い。つまりは、aとbとは、その区別自体余り大きな意味は持っていないと言えるだろう。考古学の成果と文献資料との結合自体は必要であるが、論中で指摘されているように「あり得る、信頼できる」この程度でよいということになるだろう。

四、『尚書』が孔子によって執筆されたものかどうかについて。

徐論は指摘する。近代の疑古派の人たちは、堯舜禹は全て神話中の人物で、その真实性には問題がある、あるいは、彼らは元々神話中でも存在は認められず、根本的に儒家の孔子・孟子が捏造したものであると言う。しかしこれは古

人を誹謗し貶めるもので、『論語』を読めば、孔子が堯舜禹を捏造した可能性は全くあり得ないこと、明々白々である。孔子は堯舜に対し敬虔な話を話しており、その孔子の話を分析すれば、何の臆想、何の捏造があるうかということである。禹については更に具体的である。『論語』「泰伯」篇で「禹は、吾、間然とする無し（とやかく言葉差し挟む余地は全くない）。飲食を菲（うす）くして、孝を鬼神に致し、衣服を惡（い）くして、美を黻冕（くふべん）（冠飾り）に致し、宮室を卑（い）くして、力を溝洫に盡くせり（力を農業の用水路に尽くした）。禹は、吾、間然とする無し」。禹に対して異議を唱える箇所は一点もない、と言うのである。

『尚書』については、『尚書』と孔子との関係は認めるが、『尚書』は孔子が書いたものではなく、前人の記録の基礎の上に孔子がある種の整理作業を行ったものである。しかし、孔子が目にした『尚書』と現『尚書』にはテキストとして或る異同があつた可能性はある。例えば、『左傳』（文公八年）に引く『尚書』虞書の引用は、虞書引用部分自体は同じものだが、内容は現『尚書』と異なっている。そこから「四凶」は顔ぶれを異にする。『舜典』では共工・驩兜・三苗・鯀。『左傳』では渾敦・窮奇・檮杌・饕餮である。また『左傳』が舜が登用したと挙げる賢人「八凱」と「八元」の顔ぶれも現『舜典』の登用した賢人には出ない。

五、それでは、原『尚書』成書の時期は何時かである。

私（中島）の考えでは、この問題に関しては、「堯典」中の（四仲星中）（春分等、二至二分の昏時における星の南中）現象の記事が大きな意味を持つと考える。徐論は、この天文現象については、竺可楨の結論を採用し、殷末周初の天文現象だとする。そこから、この天象の記事は西周初期乃至中期に追記されたと考える。「堯典」（四仲星中）天文観測の現象が殷末周初の現象であるか否かは、『尚書』の成書の根幹に関わる問題である。この判断は実はきわめて重要で、『尚書』の成立自体に関する枠組みを作るものである。私（中島）は、竺可楨の論には致命的な誤りがあり、この殷末周初説を採用することはできないと考えている。それについては後章で検討するが、パソコンのプラネタリウムでシミュレーションしてみた結果は驚くべきものがあつた。〈夏商周断代工程〉で出された結論、夏王朝成立時期を紀元前約二千余年とする説にほぼ一致する結果が出てきたのである。これは『尚書』だけに止まらない中国文明の枠組みに関わるきわめて重大なことである。

六、文明の発展段階と登用人物についての結論は以下である。

文明の発展段階について

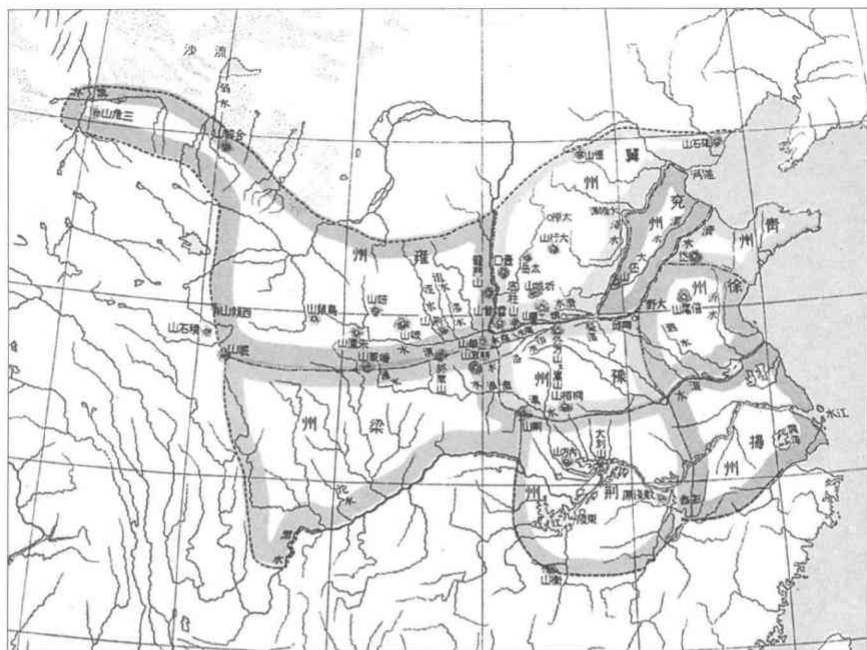
国家成立：中国の国家の成立について殷商期とする意見

があるが、国家成立は夏代に晚れるものではない。

曆法：一年を三六六日とし、閏月で調整する太陰太陽曆を採用した。論語の堯曰篇で、堯が舜に位を譲った時、「咨（ああ）爾（なんじ）舜よ、天の曆數は爾が躬（み）に在り、允（まこと）もて厥（そ）の中を執れ（允執厥中）」と言い、また「舜又た禹に命ず」と記す。この「中」は原意は算籌を盛る器具である。堯舜は當時の中原部落大連盟の首長であり、曆算は彼が管掌する重要な職掌の一つで、彼らが職務（帝位）を授受する際、算籌を盛る箱を捧げ持ったことを言う。顓頊（五帝中の第二位帝）が南正重と火正黎を官職に就けて天文観測を行い、これが曆の基礎となり、その文化が伝承されたのである。『史記・曆書』に「黃帝は……消息を起し閏餘を正した」とある。この黃帝時にすでに原始曆法を知っていたようである。仰韶晩期遺址の出土陶器に太陽紋、月紋、日暈紋及び星座紋等の天象図象があり、長期にわたる観測によって曆法の認識がなされていたことが分かる。従つて、『堯典』中の四人を四方に派遣して日月星辰を観測した説は信用できる。当時、「天の曆數」を知っていたことは十分可能である。

地方制度（巡狩・十二州・九州）：

巡狩：あり得ること。



図表30 〈「禹貢」九州図〉

出所：『中國歴史大地圖』（箭内互編著）台湾：文理出版社、1973年。

十二州：十二は大数（大いなる数字）である。つまり大きな数値を「十二」とし、実数ではない。

九州：従来は、九州なる制度は上古にはなく、書中の地理知識は戦国七雄が達した境域に限られるとして、戦国時代の「大一統」思想が古に託し臆想によって生み出したものと考えられていた。しかし考古学的に見ると、夏代はほぼ龍山時代に相当する。この龍山期の文化区画と「禹貢」九州の区画とはほぼ基本的に相似しており、そこから、「九州」の区域区分には信頼性があると徐論は述べる。九州と新石器文化がどのような対応関係にあるかについては、徐論以降の最近の研究結果、即ち蘇秉琦及び費孝通らの、「多元一体」の文化類型がこの九州に当たるの説が出されており、その説は拙論上篇で紹介した（『中国21』Vol・15「歴史と神話への視座 上篇」七一頁参照）。

#### 産物：鉄（鐵）の使用

鉄が「禹貢」に出てくることから、「禹貢」成立時期が戦国以後とされてきたが、戦国時期に初めて鉄器使用が認められるとの見解はすでに過去のものである。河北藁城臺西村商代（前14世紀）中島付記）遺址から鐵刃銅鉞が出土。商

(殷)代に鐵(隕鐵<sup>いんてつ</sup>)隕石の鉄を使用したもの)の使用が認められる。河南三門峽上村嶺<sup>くわんさんもんけつ</sup>號國墓地出土の銅柄鐵劍は西周晩期のものである。春秋時期には鉄制農具、兵器及び容器が出現。その鉄器使用は広範である。

## 七、登用人物について

人名は個人の名であると同時に氏族の名でもある。同一名が出てきても同一人物を意味しない。同一人物とすると、様々な矛盾が生じることとなる(中島付記「一つの名は、個人名であり、同時に後裔の個人もその名で呼ばれる場合もあり、氏族名・種族名であり、また地位・官職名であり得る。ちょうど日本の「天皇」という地位と呼称、及び歌舞伎役者、相撲の行司、落語の師匠等の襲名に似ている」)。

義和：堯が天象の観測に義和の四人を四方に派遣したとするのは矛盾した言い方。義和が一人であるとする顧頡剛の見解は正しい。

二十二人の任官(禹・稷<sup>しよく</sup>・契<sup>せう</sup>・皋陶<sup>こうよう</sup>・垂……等々)について：

禹・皋陶・益・伯夷：当時の人である。異説はない。  
垂・夔：古書中にその伝説はあるものの、何時の人か

は明らかでない。

龍：古書中、記載はない。別に来源があるか。

稷(周棄)：『國語』『左傳』に見える棄(棄稷)は、夏末に生まれ得たが、堯舜禹までは溯り得ないだろう。后稷は堯舜禹の頃である。伝承には矛盾が多く、疑を存するか、一家の意見に従うかである。

契(殷商の祖)：『國語』禘祭からすれば、有虞氏から出たということになる。

皋陶：当時同時代の人であるが、東夷集団に属する人である。「堯典」記載からはすでに華夏族(漢族の前身)に属する。「國語』『左傳』の記載からは、「堯典」にあるように彼が刑罰を担当していたものと思われる。

最初に述べた第二の基準の問題(文献の信頼性の基準の問題)について、以下で、立ち入って考察したい。この問題は、この時期(黄帝から堯舜の五帝期、さらに禹にかけたの時期)を考察するに際しての、文献を判断する際の基準となる、きわめて根本的な方法論上の原則の問題である。

まず、ややこしいことではあるが、この問題の文献学的な面について説明することから始めたい。

「舜、堯を平陽に囚<sup>とら</sup>う。之(堯)より帝位を取る。今、見<sup>げ</sup>

（現）に「囚堯城」有り」の文章がある。この文章が問題の焦点である。これはどこに出るかである。現在、中国で発表されている論文では、これは『竹書紀年』に出るものとして論が展開されている。例えば『黄河文化史』は「古本『竹書紀年』に曰く云々（文同、略）。堯が禪譲したのではなく、舜が篡奪したことはきわめて明確である」と述べている。その他、多くの論著が皆『竹書紀年』に言うとしている（例・沈頌金『二十世紀疑古思潮』<sup>(3)</sup>、蕭蓬父『郭店楚簡の価値と意義』等々）。しかし、これには問題がある。『竹書紀年』については前に述べたように、西晉時代に汲冢から出た本で「汲冢書」と言われる一連のものの一つであるが、今は失われた（亡佚書）である。重要な亡佚書は、後世の人が他の諸文献に引用されているものを集めてきて、出来る限り復元を試みる。これが（輯佚書）と言われる書である。『竹書紀年』も多数の学者が復元を試み、名あるもので十種以上の輯佚書ができている。著名なもので、清の朱右曾『古本竹書紀年輯校』と王国維の同本の補がある。この二つの輯佚書には、実は、今、焦点となっている文は入っていない。そして近年出た方詩銘・王修齡編『古本竹書紀年輯證』<sup>(5)</sup>には（夏紀）以後しか載せないで、当然この文も載せていない（前掲『黄河文明史』は、前掲『竹書紀年』文がこの方詩銘・王修齡編の書に出ると注しているが、これは二重の誤りである）。そして、一九五六年に出版

された輯佚書、范祥雍<sup>はんしょうよう</sup>『古本竹書紀年輯校訂補』（上海、新知識出版社）には、（補）として二つの文、「堯の末年、德衰え、舜の囚る所と爲る」と「舜、堯を囚え、復た丹朱（堯の息子）を偃塞（幽囚）し、父と相見えざらしむ」を挙げ、そこにこう記している。「以上の二則（この二つの文）を考察するに、陳逢衡『竹書紀年集證』では「汲冢瑣語」の文としている。朱右曾の説、王国維の説も同じである。『路史』『寰宇記』の原本では引いてきて『竹書紀年』としている。朱・王の二人の見解は憶測に過ぎなからうし、確証もない。結局、この輯佚本の編者范祥雍は『竹書紀年』の文と扱っているのだが、私（中島）が考察するに、これはやはり朱右曾と王国維の方が正しい。何故か。それは『竹書紀年』の堯と舜の箇所を通して読んでみれば、その話は一貫しており、話中に、こうした舜が堯を囚らえたとの挿話が介入する余地はない。さらに『晉書』東晉傳にはこの汲冢出土の文献についての簡単な解説が記されている。そこで『竹書紀年』についてこう記す。「ほぼ春秋」等の書と相応するものだが、中に經傳と大きく異なるものが記されている」として、六項を挙げている。一「夏年は殷より長年である」、二「益、啓の位を干す。啓、益を殺す」、三「太甲、伊尹を殺す」、四「文丁、季歷を殺す」、五「周の受命より穆王に至るまで百年は、穆王寿百歳と異なる」、六「幽王既に亡くなり、共伯和なる者有りて天子の

事を撰行するは、二相、共和するに非ず」である。その六項中には「舜、堯を囚にす」は挙げられていない。この『晉書』執筆時（『晉書』は唐初の房玄齡等の執筆）には汲冢書を見ての『晉書』編纂であり、彼らが見た『竹書紀年』に「舜、堯を囚にす」の記事がなかったことは間違いない。かつまた『汲冢瑣語』なる、これまた汲冢から出土した亡佚書の輯佚書が作られている。清、洪頤煊輯『汲冢瑣語』にも同文が『汲冢瑣語』の文として入れられている。この洪頤煊、さらに前掲陳逢衡『竹書紀年集證』、朱右曾、王国維の考えの方が正しく、范祥雍の方が単なる憶測だと私は考える。もちろんこの見解は推測ではあるが、ほぼ断言できるだろう。『竹書紀年』と『汲冢瑣語』では、文献の格が違い、『竹書紀年』の方が数等、上である。『晉書』束皙傳の記載によると、『瑣語』は各国の「夢を占い、妖怪を卜し、[相]を見る占卜の書」であると記されている。『竹書紀年』が魏国の史書であるのとは性格を異にし、『瑣語』は民間の占い等の習俗を記したものであつて、歴史の記録とは異なっていることに注意が要る。

ところで、『竹書紀年』といい、『汲冢瑣語』という、その輯佚はどの書の引用から復元されたのだろうか。これは唐の張守節が『史記』に『史記正義』なる注釈書を作つていて、張守節は当時存在した『括地志』に完全に依拠して『史記』中の古代の地名に注釈を付けたのである。『括地志』

もその後亡佚してしまふが、その書は、張守節の注によつて部分的にはあるが、後世に伝わることとなつた。輯佚本『括地志』の十中の八、九は、張守節『史記正義』によつて復元されたのである。『史記』注釈書である張守節のこの『史記正義』の中から『括地志』が復元され、かつ汲冢書『竹書紀年』『汲冢瑣語』も復元されたのである。

この『史記正義』では、『史記』五帝本紀の堯の箇所「舜、丹朱を南河の南に辟ける」に張守節の注がつけられおり、その注の中にこうある。『括地志』に云う「故き堯城は濮州鄆城縣東北十五里（約7キロ）に在り。竹書に云う。昔、堯德衰え、舜の囚うる所と爲る。又、偃朱の故城有り、縣の西北十五里に在り。竹書に云う。舜、堯を囚え、復た丹朱を偃塞し、父と相見えざらしむ也」と「〔偃〕〔塞〕共に〔閉じ込める〕の意」。今、『括地志』の輯佚本が編纂されてある。現代の賀次君の輯校になる本である。まさしく上記の二つの文がそのまま出てくる。当然のことである。つまり張守節は『括地志』から『竹書』に云うとある引用文を引いてきて『史記』の注としたわけである。では『竹書』とはどちらかが問題になるが、『竹書』とあるだけで、これだけではどちらかは分からない。『竹書紀年』も『汲冢瑣語』も汲冢から出土した（『竹書』（＝竹簡の書）である。ところで『括地志』とはどのような本であろうか。この書は唐の始めに李泰（唐の皇室である魏王）が主編した55



0巻の巨大な地理書である。彼は太宗皇帝李世民的第四子で、貞観<sup>じゅうがん</sup>十六年（六四二年）にこの書を完成、皇帝に捧げた。『括地志』編纂の時に使われた資料は、同本の序略によれば「貞観十三年の大簿」であるとする。彼が当時存在した、この『大簿』に記すところから取った、あるいは直接『竹書』を見て、記述したものと思われる。信頼の置ける記述であるが、やはり『竹書紀年』か『汲冢瑣語』かは決める。ところで、この『竹書』に記された内容は興味深いものである。『括地志』によれば故堯城が濮州<sup>ぼくしゅう</sup>鄆城<sup>おんじょう</sup>縣東北にあったわけである。この濮州鄆城縣とは現在の山東省鄆城<sup>おんじょう</sup>県である。山東省の西端、河南省との省境に近い。唐の当時、濮州の州治の置かれた地である。三国魏の時、曹植がこの地に封ぜられた地でもある。この『括地志』の記載には、一つは『括地志』自体の地の文、二つは引用された『竹書』（多分『汲冢瑣語』）の引用文、この両種がある。『汲冢瑣語』は前記したように、西晉の時（二七九年）戦国時代晩期の魏王墓から出土した竹書である。つまり戦国晩期以前の文献である。一方、『括地志』の地の文には「故の堯城は濮州鄆城縣東北十五里に在り」「偃朱の故城有り、縣の西北十五里に在り」とあるのが注目される。同じ箇所にも同県の「陶丘」が記され、これは『史記』夏本紀（即ち『尚書』「禹貢」の記載）の「洺<sup>いっ</sup>（川名）、滎<sup>けい</sup>（滎水）」と爲り、東、陶丘の北に出る」という「陶丘」だとの注が付けられ

ている。つまりは、この地は堯・舜・禹がその昔活躍した土地である。「偃朱」とは堯の子丹朱を「偃塞<sup>えんそく</sup>」した（閉じこめた）地だということである。唐初<sup>じゅう</sup>の地理志の記述に、民間にあったであろう堯時に関する伝承が出るのである（竹書によつてできたものかも知れないが、不詳である）。以上が文献学上の問題である。

問題は最初に挙げた文献判断の基準の問題である。これは、かかる伝説時代から歴史時代へと向かう時期の文献資料の信頼度をどう見ればよいか、という方法論上の原則に関わる問題である。その場合、徐論のいうように（『正統』系統化資料よりも（傍系）非整理資料を優先させなければならぬ）かどうか。（傍系）資料優先の原則が、果たして一般的にどこまで妥当性を持つかである。

徐論によれば過去には（『正統』系統化資料が優位にあったという。これはその通りである。しかし、徐論は今の新史学はそうではない、その逆に（傍系）非整理資料でもつて（『正統』系統化資料を検証しなければならぬという。（傍系）非整理資料が優先するといふのである。これは妥当だろうか。

もしそうなら、（『正統』系統化資料の『尚書』頭三篇よりも、（傍系）非整理資料である『竹書紀年』とか『汲冢瑣語』を優先させなければならないということになる。だと

するなら、あれほどの拡がりを持って伝承されてきている堯舜禹の禪讓伝承よりも、『汲冢瑣語』に出る「舜、堯を囚にす」の方を優先させなければならないということになるのだろうか。私は、やはり、この問題に関しては、禪讓伝承は否定するわけにはいかなないと考える。

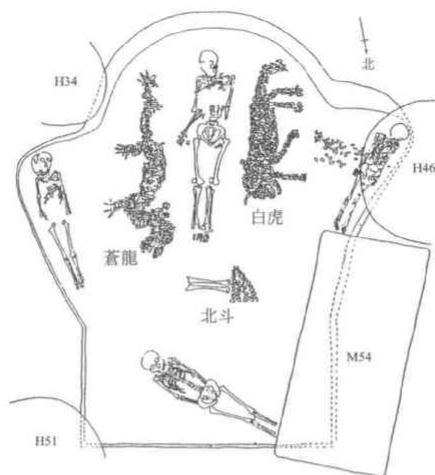
かつ、ここである「正統」系統化資料の中に一歩立ち入って検討を加えてみなければならぬ。徐論にいうように、「正統」系統化資料とは『尚書』頭三篇、『周易』繫辭傳、『國語』、『左傳』、『史記』五帝本紀・夏本紀・周本紀である。だが、これら「正統」系統化資料も皆一様ではない。『史記』五帝本紀等がそれ以前にあった資料をとりまとめ系統化した史書であること、これは確かである。『國語』『左傳』が史料として信頼性の高いことは、前にすでに検討し終えた。『周易』繫辭傳は、中身は抽象性の強い哲理と伏犠に関する伝承を伝えるものであり、これは直接関係がないので、ここではひとまず置いておこう。問題は『尚書』頭三篇である。だが、それは今まさしくその検討を進めようとしている対象であり、検討の結果が出れば、その結果は方法的な原理の中に組み入れて然るべきであろう。一方、『竹書紀年』と『汲冢瑣語』の方はどうであろうか。これは、先に述べた通り、戦国魏の史書と雑書である。確かに「傍系」非整理資料と言って差し支えない。『竹書紀年』は、魏の国に伝わる戦国期の史書としてかなり高い評価を

受けてもいる。内容的には信頼できる資料とできない資料とが半ばするとされている。『汲冢瑣語』は書の性格からも民間伝承を伝えてはいるが、史書としての信頼性には今一つ飽き足らないものがある。

だとするなら、そこから我々はどういう結論を導き出せばよいか。「正統」系統化資料が優先するか、それとも「傍系」非整理資料が優先するのか。今ここに興味深い見解がある。それを見てみよう。

それは沈頌金の『二十世紀疑古思潮』中の論である。これを紹介したい。この沈頌金論文の要旨は以下である。

『竹書紀年』に「舜、堯を平陽に于いて囚にし、之より帝位を取る」及び「益、啓の位を干し、啓之を殺す」の記載がある（中島付記「前記したように前者は『竹書紀年』ではなく、『汲冢瑣語』。禪讓という制度は、一存、存在したのか否か。権力移行については、〈選挙〉と〈争奪〉なる二つの説がある。顧頡剛は論文「禪讓説は墨家より始まる」で禪讓説は墨家が彼らの「尚賢」（賢者尊重）と「尚同」（平等主義）を宣伝するために作り出したものだとした。顧頡剛論によると、『墨子』中には堯から舜への禪讓はあるが、舜から禹への禪讓はなかったのだが、後人がこれを付加した。また『孟子』中の禪讓物語は墨家の説が儒家に流入し、改造されて出来上がったも



図表31 〈河南漢陽西水坡45号墓〉

出所：馮時『中国天文考古学』社会科学文献出版社、2001年。

のであり、『論語』「堯曰」篇も後人が戦国の鄒衍の学説を用いて作ったものだ、とした。

しかし、紀元前三〇〇〇年の龍山文化時期には農業・牧畜が発展し、私有財産が出現。大汶口文化にはすでに貴族階層、貧富の差と階層分化が見られる。時代は氏族社会の枠を越え、大集団共同体が形成されていった。(中島付記「紀元前三〇〇〇年、新石器仰韶文化に属する河南漢陽西水坡墓出土の随葬の貝殻文様には埋葬骨格の横に龍と虎があしらわれ、王権にも匹敵すると思われる権力を持つ人物の存在がすでに認められる。図表31参照」。夏王朝の前夕、即ち伝説中の堯舜禹時代には、社会の分化は加速され、これは「堯典」の記載と照応しあうものであって、「堯典」記載に根拠はないとは言えない。

郭店出土の楚簡中に「唐虞の道」篇がある。これは早期の儒家の禪讓説について述べる。従来の学説に存在した孔子と孟子の間の空白を埋め、賢人の推挙、禪讓に関する新しい材料を提供した。次のように記す。

「唐虞(陶唐氏の堯、有虞氏の舜を指す)の道は、禪じて伝えず(位を禪讓して我が子に伝えることはしない)。……堯舜の行いは、親(肉親)を愛して賢を尊ぶ。親を愛す、故に孝なり。賢を尊ぶ、故に禪す。……禪なるは、徳を上め賢に授く(謂いなり)」。禪讓なるものは徳を上め賢に授くことを指しているものである」。

この禪讓制についての叙述は、確かに、過度の「仁」「義」「賢」等の後世の道德規範と理想を強調していて、事実との間に一定の距離は存在するであろうが、時代の「古老推挙制」の史実を伝えるものであり、往事に関する追憶を止めるものである。

堯舜禹は、過酷な実際の闘争中で生まれ、かつ部族の成員の推挙を通して出てきた集団の指導者である。禪讓制に出てくる人々は、その実、部族集団の領袖として長期の実際の闘争という試練を経て推挙、擁立された人物である。この過程は平和的な禪讓ではなく、暴力を伴う奪取だったであろう。啓が益を殺して自立するに至る過程は、領袖たちが選挙から世襲へと向かい、禪讓制が終焉するという転換を物語る。だがこれらは決して禪讓制の荒唐無稽を意味するものではない。

以上が沈頌金論文の内容である。沈論の意味するところは、禪讓制は、美化は儒家によつてなされてはいるが、史実に属し、実体には、必ずしも平和的な権力移行ではなく、暴力的な奪取をも伴ったものであっただろうが、〈世襲〉Ⅱ権力の我が子への譲渡と代々の世襲Ⅱとは異なる制度〈禪讓〉の存在を物語っている、と述べるものである。

ここから我々は次の結論を導きだすことができる。問題

は、〈正統〉文献資料と〈傍系〉文献資料とどちらにより大きな信頼性を置くかである。徐論では、〈傍系〉資料の方が信頼性は大きいとする。しかし、もしそうだとするならば、我々は禪讓と世襲の両制度で、〈傍系〉資料を優先させて禪讓を否定し、世襲、少なくとも権力の暴力的な奪取を採用しなければならぬことになる。だが、あれほど広い拡がりを持つ禪讓説を真つ向から否定することにはためらいがあることはすでに述べた。この沈頌金論が記す通りである。文献的にも墨家に先立って今、「唐虞の道」なる資料が郭店竹簡によつて日の目をみた。墨家禪讓説開始説は出土文献からいっても成り立ち得ないことが明らかになった。とするなら、文献資料の信頼性という原則において〈正統〉資料よりも〈傍系〉資料を優先させるという基準を立てることはできないということになるであろうか。

問題を整理してみよう。禪讓・世襲については、堯から舜への禪讓がある。この際、堯の息子丹朱に譲るかどうかが問題になる。次に、舜から禹への禪讓がある。この際、舜の子商均に譲るかどうかが問題になる。次に、禹の死後、禹の子啓に譲るかどうかが問題になる。この時、禹の臣益に一旦帝位を授けるのだが、諸侯は益を去って、啓のもとに赴く。そのため啓は帝位を継承することになる。ただし、この最後の一節は『尚書』には出ないが『史記』にはそれ

を記している。『史記』は『孟子』萬章篇によつてここを記述したのである。以下である。「禹崩じるに及びて、(天子の地位を譲り) 益に授くと雖も、益の禹を佐る日淺く、天下未だ治まず。故に諸侯皆な益を去りて啓に朝し、曰く「吾が君禹の子なり」と。是に於いて啓、遂に天子の位に即く」とある。それに対し『汲冢瑣語』では「益、啓の位を干す。啓、益を殺す」と記すのである。

堯から舜への禪讓については、『尚書』も『史記』も記す内容は同じである。『史記』は『尚書』を踏襲したのである。これに対し『竹書』(おそらく『汲冢瑣語』)が「堯の末年、徳衰え、舜の囚うる所と爲る」と「舜、堯を囚え、復た丹朱を偃塞し、父と相見えざらしむ」と記すのである。一方、禹の死後に益に帝位を譲るか、啓が帝位に即くかが問題になる。『竹書紀年』はこれを「益、啓の位を干し、啓之を殺す」と記しているのである。これが世襲の開始を意味する。世襲とは儒家によつて「親を愛す」と美化される一面、大きな集団の中での特定の一族による権力と財富の独占とその擁護であり、他集団への力による抑圧を伴う。一方、禪讓は、子孫への権力譲渡ならざる制度であることは確かで、集団的な推挙と和平的な権力移行を実体とする一面があると同時に、沈頌金論文が述べているように内部に権力争いを伴うその結果だと想像させる。そして、まさしく禹は、舜から禪讓され、その帝位を子の啓へと譲る結

果になる。そうした禪讓から世襲への橋渡しをするキーパーソンなのである。

この場合、〈正統〉資料(『尚書』『史記』)を取るか、〈傍系〉(『竹書紀年』『汲冢瑣語』)資料を取るかである。だが、この場合も、どちらかに決める決定的な根拠は見出し難いが、前掲沈頌金論に見る如くに、両者を勘案する必要があるということになるだろう。堯と舜との関係においては、禪讓説は全体として認めざるを得ない。また禹から啓への帝位の授受(世襲)では、益の干渉はあったかも知れない。その過程において、沈頌金論のような考えを取るのが現実的であろう。方法論的原理として、〈正統〉系統化資料か(傍系)非整理資料かの択一ではなく、両者を勘案し、時に前者を優先させ、時に後者を優先させる。ケース・バイ・ケースで臨むべきだと考える。この堯から舜への〈禪讓〉と禹死後の啓と益との帝位継承に限って言えば、〈禪讓〉及び〈世襲〉という『尚書』設定の大きな枠組み自体を棄てることはできない。その枠組みの中で、具体的な状況について『竹書紀年』と『汲冢瑣語』の記載が加味されて然るべきかと考えられる。『尚書』なる〈正統〉系統化資料は、依然として文献価値は有効であり、ここでは、〈傍系〉非整理資料に優先すると認めざるを得ない。徐論にいう〈傍系〉非整理資料を〈正統〉系統化資料に優先させるという原則を一般的原則とするわけにはいかない。また、

堯から舜への政權移譲が平和的な移譲か暴力的な奪取かが問われるとするならば、『汲冢瑣語』の暴力的な奪取、篡奪を取るわけにはいくまい。他方、堯の息子丹朱は堯自身から「鬻訟」（騒々しい虚言で争弁を好む）で駄目だと讓位を拒まれた人物である（堯典）。彼は舜の帝位即位に対して逆らった可能性は充分にあり、「丹朱を偃塞」した（『汲冢瑣語』）ことは考えられないことではない。

「（傍系）非整理資料」とは言うが、（傍系）資料は（傍系）資料なりに、それぞれ個別に、整理・加手された経緯を持つ。一方、〈正統〉資料については、幾つかの現行經典の最終整理者と目される孔子のことは（伝承は）伝え述べるが、自分で作り出すことはしない」（述べて作らず）『論語』述而篇）の持つ意味は重い。だが、原伝承成立の経緯はなお闇の中にある。〈正統〉資料と（傍系）資料と、一方を他方で検証する作業は欠かせないと言わねばならない。

## 注

- （1）『中國古史の傳説時代』一九四三年初版本。『中國古史の傳説時代』初版本影印本、台灣：地平出版社、一九七八年。『中國古史の傳説時代』増訂版、科学出版社、一九六九年。『中國古史の傳説時代』増訂版新版、文物出版社、一九八五年。

- （2）李學勤・徐吉軍主編『黃河文化史』江西教育出版社、

二〇〇三年、八八頁。執筆者36名。執筆担当部分は記さない。なお、同書では『孟子』萬章章句上「而（舜）居堯之宮、逼堯之子、是篡也、非天與也」を引用して、上記竹書の「舜、堯を平陽に囚う。之（堯）より帝位を取る」の記載が歴史的な事実と符合していると述べているが、これは誤解も甚だしい。この『孟子』の文章は仮定の意味であり、「もし舜が堯の子に逼って堯の宮に居たなら、それは篡奪になる」と言っているものであって、舜が堯より天子の位を篡奪した証拠などというものでは決してない。逆に、孟子は堯から舜への禪讓を歴史的な事実と認め、かつそれをよしとしているのである。なお楊伯峻はこの「而」字に注して「而」、同「如」。説見王引之『經傳釋詞』（「而」は「如（もし）」と同じ。説は王引之『經傳釋詞』に見える）と記している。訳文に「如果自己居住於堯的宮室、逼迫堯的兒子……這是篡奪……」（もし自分が堯の宮室に住み、堯の子に逼ったなら……それは篡奪である……）と訳している（楊伯峻『孟子譯注』上、中華書局、一九六〇年、二一九頁）。

- （3）吳少珉・趙金昭主編『二十世紀疑古思潮』第四章（沈頌金執筆）学苑出版社、二〇〇三年、四八五頁。

- （4）蕭蓬父「郭店楚簡の価値と意義」（『郭店楚簡國際學術研究討論會』湖北人民出版社、二〇〇〇年所収）一四頁。

- （5）方詩銘・王修齡編『古本竹書紀年輯證』上海古籍出版社、一九八一年。

- （6）注（3）に同じ、四八五—四八七頁。